# 事業内容詳細　地域連携ハブ拠点「くるみの森」

＜資料　１＞

■理念　支援の必要な人が、経験と出会いの中で成長し、生きがいをもち一人の市民として尊厳を守られ、最後まで安心して暮らし続ける街つくり

■事業内容

1　福祉サービス事業

多機能型サービス　（児童発達・放課後等デイ・生活介護）

放課後等デイサービス　ホームヘルプサービス

2　公益的活動　＜地域の社会課題解決・地域貢献活動＞

＜地域ニーズ＞

・宿泊体験（コテージで宿泊体験）

・ベビこば（ハンディのある赤ちゃんのママサークル）

・pitt　（不登校、課題を抱える子の余暇活動）

・くるみかふぇ（就労している人たち）

＜企業と＞　・子どもの貧困勉強会　・子どもの会社見学

＜他団体と＞・学習支援（一般社団）　・他ＮＰＯとの共同研修

＜人材育成　講師＞

・市　市役所新人職員、民生委員、学童指導員　・社協　日常生活自立支援員

・県　ヘルパー研修　強度行動障害支援者養成研修

若いママたちが「福祉施設」に子どもを預ける後ろめたさがないためにも、また兄弟たちが羨ましく感じるような「おしゃれなデザイン」さと、視覚過敏の発達障害の子どもがつらくないこと、地域の大人の人も出入りしやすいことを重視し、(色鮮やかな子どもらしい建物は避けた)「シンプルなデザイン」を心がけました。

建物は、福祉施設らしくしないことを目標としましたが、ポイントは「窓」です。

福祉施設は消防法などの要件のため、同じサイズの窓が並ぶことが多くなりデザイン性が低くなります。窓の位置や形を変える工夫を積極的に行いました。また清潔感と周囲の土地との調和を考えた結果、外観をホワイトとブラウンに配色しました。

建物は幹線道路に面していながらも調整区域のため周囲に建物がありません。夕方から夜にかけては、高窓や壁面照明で建物が「ＧＬＡＳＳ　ＣＵＢＥ」(光るガラスの箱)のようになります。明るく温かく過ごしている子どもたちを象徴し、子どもたちを迎えにくるママがその光で癒されるイメージです。

## 多機能型サービス　らら　こぱん

重症心身障害児（者）を主としたサービス　（医療的ケアに対応）

■目的

児童発達支援【未就学児】　療育やその家族に対する支援を行う
放課後等デイサービス【６才～１８才】　生活能力向上のための訓練を行う
生活介護【１８才～】　介護とともに創作活動、生産活動の機会提供を行う

■定員　５名　（０歳～）

■利用者数（１７名）

| | |
|---|---|
| 重症心身障害 | ５名 |
| 難病 | ４名 |
| 疾患治癒後のフォロー | １名 |
| 身体・知的障害 | ４名 |
| 発達・知的障害 | ２名 |
| ダウン症 | １名 |

■医療的ケア

吸痰　気管切開カニューレ管理
経管栄養　胃瘻　呼吸リハ　等

■年齢

| | |
|---|---|
| 未就学 | ９名 |
| 学齢児 | ４名 |
| 成人等 | ４名 |

放課後等デイサービス

## チャイルドサポート　こぱん

■目的　学校在学中の障害児に対して、放課後や夏休み等の長期休暇中において、生活能力向上のための訓練等を継続的に提供することにより、学校教育と相まって障害児の自立を促進するとともに、放課後等の居場所づくりを推進する

■定員　１０名　（６歳～１８歳）

■契約児童数（６２名）と利用目的

| | |
|---|---|
| 発達障害＋知的障害 | ３８名 |
| 知的障害 | １５名 |
| ダウン症 | ７名 |
| 高次脳機能障害 | １名 |
| 身体障害 | １名 |

■所属

| | |
|---|---|
| 支援学校 | ３３名 |
| 支援級 | ２１名 |
| 通常級 | ８名 |

■年齢

| | |
|---|---|
| 小学生 | ３４名 |
| 中学生 | ２３名 |
| 高校生 | ５名 |

＜児童発達支援スペース＞

＜放課後等デイサービススペース＞

児童発達支援の子どもたちが、友だちと遊んだり、食事をとるスペースです。バギーでの移動や注入など医療的ケアが行えるようにすっきり広い空間にしました。晴れた日に、バギーからも立山連峰が見える低めの窓を設置し、ウッドデッキに出て外気浴もできます。眩しくないダウンライトを工夫しました。最大定員７名

放課後等デイサービスは、発達障害の子どもたちが落ち着けるように、棚によって視覚刺激を制限した空間を作りました。玄関を入ると掲示ボードがあり、自分の過ごすスペースや一緒に過ごす人が、色・数字・写真などの情報でわかるようにしました。棚を使い各自の予定や活動明確化しました。最大定員 15 名

＜リハビリルーム＞

多くの重症心身障害児者や医療的ケアの必要な子どもの訓練を専門的に行ってきた理学療法士が、楽しく心身機能を維持向上するためのリハビリを行うスペースです。ブランコやトランポリンなど全身を使う療育機器も整備できました。児童発達支援の子どもたちは、ここで朝の会や遊び、リトミック等も行います。

＜調理体験室＞

放課後デイサービスを利用する子どもたちが、おやつや軽食作りをするための部屋です。調理は、切る、混ぜる、焼く、盛り付ける、食べるなどいろいろな工程があり道具を使うことで自立支援にもなります。友達とのコミュニケーション、役割分担、楽しみの共有など社会性の向上を図る機会にもなります。

＜静養室＞

重症心身障害児者や、医療的ケアの必要な子どもたちが静養できる個室スペースです。
活動スペースから少し距離をとり、静かに休めるようにしました。
静養室から脱衣室、浴室とリフトを設置し、入浴にも対応できるようになっています。

＜防音個室＞

音過敏の子どもが過ごす個室を 2 室設置しました。入口ドアの下にゴムが降りるしくみになっており、音を遮断できる構造になっています。発達障害や、医療的ケアの必要な重症心身障害の子どもの中にも音過敏や、音が発作を誘発する子どもたちがいます。奥はカームダウンスペースとして、不安定になった時に自分で感情コントロールを行うために使用します。

＜浴室＞

重度の障害児者の入浴を想定し、2 人介助で入浴ができるスペースを確保するため、手すりは最小限にしました。
静養室で更衣し、リフトで移動、入浴することができます。

＜洗面所＞

昇降式の洗面台を設置し、幼児から車いすの大人まで、高さを調節して手洗いができます。
子どもたちが、外から帰った時にすぐ手洗いを行う習慣を身につけるために、玄関からすぐの場所に洗面所を設置しました。

＜飲食製造（仕出し）厨房＞

地元の食材を使った健康に配慮したサンドイッチを製造し、医療者に宅配するための設備を整えました。
医療で救われた子どもたちが、医師や看護師の健康を支える役割を担うコンセプトです。
専門職員が設備の衛生管理を行い、子ども食堂やハロウィンパーティなど地域にも開放する予定です。

＜菓子製造厨房＞

久遠チョコレートの製造工場として、注文に応じてチョコレートを製造し納品する予定です。
医療的ケアのある子どもたちが、成人したあとの仕事として役割とやりがいをもって過ごせるように設置しました。働く姿がかふぇスペースから見えることで啓発の役割も持てるようにしました。

＜食品作業室＞

野菜の皮をむく、食品のパッケージを行う、シールを貼るなど準備をする作業室です。
チョコレートの重さを量る作業なども行います。
同じ姿勢で疲れた場合など必要な時は 2 階の静養室で横になるなど、体調に合わせた働き方ができます。

＜多目的トイレ＞

おむつ交換ができる収納式多目的シートやオストメイト対応設備、昇降式洗面台を設置しました。
発達障害児の中には便器に物を投げ込むこだわりのある子どもがおり、便器を詰まらせることがあります。パブコン便器は掃除口があり詰まり除去作業もできる機能があります。

＜地域交流カフェスペース＞

赤ちゃん教室や、ママサークル、ボランティアミーティング、相談など多目的に使用できるスペースです。椅子は、赤ちゃんや重症心身障害の子どもを抱いて座っても余裕のある幅と安定感のあるものを選びました。ペンダントライトは、地場産業である高岡銅器を使用しました。スペースは狭いですが、大きな窓からは立山が見え開放感があります。
収容人数 10 名

＜研修室＞

スタッフ研修や多職種研修、ケア会議、地域の会合など幅広く使用する予定です。富山大学小児看護学、医学部や福祉短期大学学生サークル、他のＮＰＯ、アロマやマッサージ等の市民講師などと連携予定で、子ども食堂も開始します。
日曜日もママのサークル活動などに利用予定で、外部団体への貸し出しは低料金で有料の予定です。収容人数 20 名

＜スタッフルーム＞

福祉施設のスタッフルームは、書類にあふれて汚いのが一般的です。教材作りもあるため、材料になる物もどんどん増えていきます。
そこで、企業のようにフリーアドレスにしました。個人の書類ロッカーを確保し、必要書類や必要な物以外は持ち込まず整理整頓を心がけます。

＜相談室＞

相談室は、建物の奥の静かな場所を確保しました。つきあたりの位置のため廊下を人が移動することも少なく、落ちついて話をすることができます。
椅子もデザイン性のある温かな物を選び、優しい雰囲気をもてるようにしました。

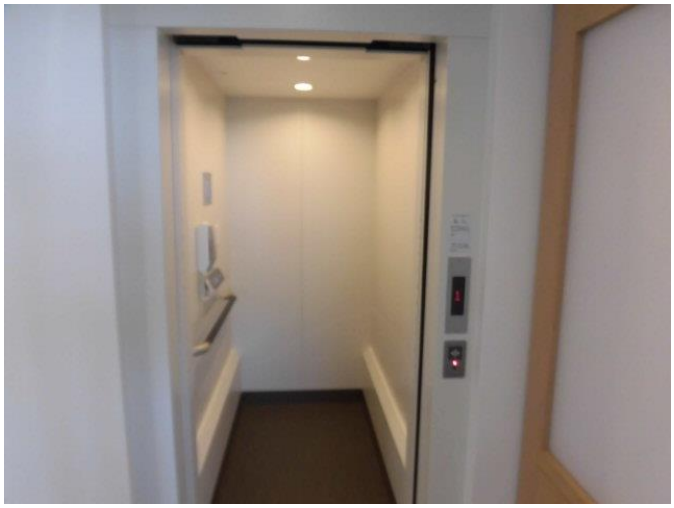
＜表示パネル＞

法人名の「くるみ」は子どもたちの「来る未来」が明るく幸せであるように願い、その未来を地域でくるむ(包括)で支えたい思いから名づけました。
拠点ができたことで、その思いや人のつながりは、森のようにもっともっと大きく深く広がりをもっていくことになると思い、新しい拠点の名前を「くるみの森」と名付けました。

＜福祉車両＞

今まで法人所有の車いす対応送迎車両は 1 台のみで、しかも普通車タイプでした。そのため、保護者に送迎をお願いする場合もありました。非常電源、酸素ボンベ固定装置など医療的ケアに対応した車両は、利用者、家族、スタッフ共に心待ちにしていました。

＜エレベーター＞



児童発達支援の子どもと母親が利用するイメージで、家庭用の最大エレベーターを設置しました。ドアの開閉時間を設定でき、自動水平調節を行います。エレベーターのボタン押しが好きな発達障害の子どもたちからは 1 階 2 階ともにエレベーターの存在が見えない設計上の工夫をしています。

追加工事

＜自家発電装置＞

呼吸器を使用している幼児を支援した際に、停電や非常時の電源の確保の必要性を痛感しました。東日本大震災や熊本地震で、医療的ケアの子どもたちの支援の困難な状況も知り、災害時に備えて自家発電装置を追加設置しました。

＜コンセント＞

非常用電源は茶色のコンセントで、建物内に４か所設置しました。児童発達支援スペース、放課後等デイサービススペースは、医療的ケアの子どもたちに対応。スタッフルームは緊急連絡用、地域交流カフェスペースは地域の人も使えるように考えました。

＜床暖房＞

体温調節ができず、手足の麻痺や拘縮のため血行も悪く末端が冷える子どもたちが多いため、2 階部分全床に床暖房を追加設置しました。北陸の冬は寒いのでファンヒーターはよく使用しますが、ファンヒーターの熱は部屋の上部を温め下部が冷えるので、底冷えします。館内全体を温めるには床暖房が最も適しています。

＜自動ドア＞

バギーや車いす利用の子どもたちのために、玄関ドアを自動ドアに変更しました。手を触れるだけで簡単にドアが開くので出入りがしやすくなりました。開閉時間も設定できるので、ドアに挟まる危険もなく慌てず移動ができます。また、玄関を奥に設置にして天井屋根があることで、雨天時も車いす車両から濡れることなく移動ができます。